

戦争体験を語る

富山県 東山 宏

強化の重要な折でもあつて回避され、ために海軍側の大本営陸軍部に対する不信と不満を増徴させるのみでなく、当事者の第三十二軍司令部に与えた感情と意志疎隔の禍因を作ることとなつたと言われている。

しばらくして沖縄守備隊は新事態に対処する新陣地構築という緊急にして最難事に直面することとなつた。

大正十一（一九二二）年八月九日、富山県中新川郡釜ヶ淵村末三賀に生れる。現在は富山県中新川郡立山町末三賀となつている。家族は祖父母、父母、兄弟は男三女一人でした。釜ヶ淵村立尋常高等科を卒業、専修学校を一年で退学、昭和十四年一月十五日、名古屋陸軍造兵廠に入廠する。昭和十七年五月、徴兵検査、同十八年一月十日、富山東部第四十八部隊第二機関銃中隊に入隊（元富山三五連隊）しました。

その前日の一月九日、釜ヶ淵村民や小学校生徒及び親族一同の歓呼の声に送られ、故郷を後に電車で出発、その日は富山市内の旅館に一泊、明けて一月十日、新雪を踏んで富山連隊に入隊しました。広場で私服と軍服に着替えが終わると昼食で、既に机に配膳してありました。班長は「食事

はよくかんで、ゆっくりと食べなさい」との言葉。

入隊前には食事は早く食べることと聞かされていましたが、軍隊も変わったのかと思っていました。いろいろ身の回りの整理が終わって「夕食用意」に机に配分する。班長も同じ机で「頂きます」で

一口か二口食べた途端「この馬鹿者！ 軍隊は旅館でない」と木銃で食器等を引っくり返し「早く片付ける、横に整列」で私的制裁の始まりです。

ほつぺたを叩かれ、腫れ上がるほどです。朝五時起床、二階への二十四段の階段を二回飛び降りるという。裸一貫で肌をタワシで赤くなる程、気合を掛けて六十余回摩擦する。また機関銃を銃身と取付部分とに分解して肩にして、新雪で荒れた道を倉垣の飛行場へ、行くも帰るも駆け足です。四個班の競走で二番以下は三百メートル先の練兵所を折り返して回って来る。初年兵は息が切れそうである。

内務班では夕食、点呼、消灯まで大和魂を入れてやるといい、顔や頭、お尻等をまるで犬か猫の

ように叩かれる。板戸一枚隣は第六中隊の小銃隊。その隊の私の同級生の追野義光君が朝、食事を受け取りにきた時に会うと「東山、毎晩毎晩、私的制裁が恐ろしい。私機関銃でなくて助かった」と言う、この言葉通りです。

満州老黒山よりきた初年兵教育の担当教官は比川少尉、若林曹長それに下士官の三人でした。三月九日夕方五時、東部第四十八部隊は出発のため営門を出ました。護国神社参拝後、富山駅へ。連隊から駅までの道路は見送人で押すな押すなで、「元気で」「身体に気を付けて」「頑張つてこい」などの歓呼の声は天に届くほどである。家族や親戚の方々の顔は見えないが「行って来るぞ」と呼び軍用列車に乗り込む。

九時発車、汽車の窓は締め切られている。着いた所は下関、三月十一日、輸送船に乗り込む。朝鮮釜山港に上陸、鮮満国境通過、三月十五日朝、老黒山着、第二機関銃中隊窪田隊へ配属される。

見渡す限りの原野で、丘陵地にある兵舎は半地

下造り。兵隊は防寒具を身に付けて目玉だけ出して行動するという、こんな厳しい環境で初年兵教育を受けました。

馬が百五十頭程いて、六時起床、点呼、兵舎の掃除、馬の手入れである。老黒山は水不足で、食器洗いの時には寒気で食器が手に貼り付いて、手の皮が剥がれる程である。用便は出るなり氷となる。便所内には鉄棒が用意されていて、鉄棒でその氷を砕くのです。

訓練は小高い山の中で、初年兵は馬の草刈りを行う。老黒山では内地で食用にするよもぎの二メートル程に大きく長いものを四、五本、鋏で切つて背中に担いで馬舎へ帰る。

しかし内地と違い、ここでは私的制裁はほとんどなく我等初年兵は大変かわいがって頂きました。夕食後は点呼、班長は初年兵にいろいろ注意をする。班長と召集兵と争いが起ることがあります。

兵舎内はペチカの暖房があり、二十四時間石炭を燃やす。石炭は外の山から掘り、無尽蔵です。

二百人ほどが乗り、兵器は天井に吊り下げ身動き出来ない有様です。

途中で食事するのも三口程。用便は貨車の戸を五十センチほど開け、お尻を外へ出して排出する。汽車は昼夜なく走り続け、中国に入り、やがて徐州を通り、齊南駅に近づくが鐵路が爆破され通行不能でした。

兵隊は下車し、外で蚤退治で棒で叩き落す。二日程で汽車は出発する。揚子江を渡り南京に到着、一週間程滞在して身体の健康を回復する。気候は暖かく兵隊は揚子江畔で裸になり洗濯をしました。身体も少し元気となり、小舟で各分隊は揚子江を遡行して漢口に上陸しました。さらに鉄道で長江府駅で下車、私は先兵としてトラックの上に機関銃を取り付け、五台編成で徳安方面へ出発する。途中、銃声と黄砂に気を取られながら湖北省徳安に着きました。

ここでしばらく休んだ後、目的地の床河鎮にたどり着く。城内は広く、城壁の周りは四キロほど、

外は小雪が吹き荒れ零下三〇度、体感温度は六〇度、手足はしびれ、麻痺します。

やがて六月も過ぎ七月に入ると、第一期の検閲も終わり、星一つ増えた一等兵が約二十三人できました。明日から一等兵となり、一時間早起きし、銃剣術、射撃の訓練。「上等兵候補、三人前へ」「下士官候補、五人前へ」と二、三年兵に鍛えられ、一段と気合が入ります。

七月、八月頃より戦況は悪化し、硫黄島玉砕、サイパン島玉砕のニュースも初年兵に伝えられ、訓練も激しくなりました。

十月頃より関東軍がソ満国境に戦車壕を構築するため各部隊統々と国境に移動、集結しました。

昭和十九年二月十一日、大動員命令が下り窪田機関銃中隊より四分の一の初年兵、二、三年召集兵が転属となり、牡丹江に集結し、第十野戦補充歩兵第一大隊に転属となりました。そのため二月二十九日夜、小雪が吹き舞う寒い日で、手足がしびれるなか掖河を出発、満鉄有蓋貨車一台に兵隊

ここは我々の警備駐屯地です。二、三日の間、続々と徒歩で後続の兵たちが床河鎮に到着します。

全機関銃中隊や兵隊も揃ったところで、頭の毛、足と手の爪を切り、家族へ伝える事情あれば遺言を書き袋に入れます。代わりに万一の場合の兵隊の名前確認の番号入りの小判の大きさのメタルを受け取る。メタルは常に身体に付けます。

床河鎮では本部を中心に城外に分哨を立て敵の攻撃に備える。米国の戦闘機は再度攻撃に来て我軍の被害も多く出る。また、討伐などでも油断できず、警備は厳しい限りです。

年が明けて床河鎮を出発、天門県の天門に到着する。ここで独立歩兵第五百五大隊機関銃中隊に編入となる。

私は天門と應城中門に架る揚河子の木造橋、長さ約八十メートルの重点地区を担当する。軍通信隊五、六人、機関銃一丁、兵隊一個分隊、保安隊三十人ほどで指揮官には大場少尉が派遣された。本部の命令では長期戦の方針とかで、兵隊の食糧

も現地調達となり、その責任者に私が指名される。中国の民衆代表者が集まってもらい、米、麦、野菜などの納入の依頼をする。民衆が私等に協力してくれ嬉しく感謝しました。私は本部より代金を貰い民衆に支払いました。

困ったのは時計がなくて時間が分からず、ここには時計の修理店もありません。民衆は蓬を乾かして縄にし燃やし、その燃える長さで時間を知ることになっているとのことです。

夜は二時三十分頃に明るくなり、その上日中は暑く、屋根の雀が焼け落ちる程である。寒くなる雪が一尺程積もりますが三十分程で消えてなくなります。

五、六月頃スジャホウ分哨が攻撃され、機関銃一個分隊が救援して白兵戦となり、機関銃一丁が敵に獲られ、我が方も戦友十人ほど戦死し、残念でした。

この頃より敵の攻撃が激しさを増しました。日本軍の戦況も次第に悪化し、八月二十日頃どこか

らともなく降伏のニュースが耳に入るので確認出来ませんでした。八月二十五日、武装解除、兵器使用禁止、兵器をすぐ一カ所に集めよとの命がありました。兵隊は半信半疑の様子で野戦倉庫に收容され、皆泣いたものです。

昭和二十年九月五日頃、中国軍第九十五師団副官から日本の若い兵隊数人選出せよとの命令があり、一番先に私の名前が出ました。しかるにその目的は不明で、流れてきた話では、中国に永久に残って重労働とかの不安な噂が広まりました。

二、三日後、副官が迎えに来ました。選出された兵隊は涙ながら副官に連れられ、中国の第九十五師団の副官所属の倉庫に集められた武装解除の兵器類や日本軍馬の数量等の把握と管理方法の打ち合わせとなりました。

しかるに中国副官は大変親切で、その上我々を可愛がって下さり、食事は真白の白米飯で副食も多く、その上給料を貰い大変感謝しました。

昭和二十一年四月ころ、副官の東山宏（トンサ

ンホン）がきて、明日、日本へ帰すといい、私を本隊の收容所に送るとのこと。翌日、收容所へ送ってもらう。收容所の皆は空腹で食料探しに川魚や蛇など捕りに行き、残っている兵隊は少ない。私は皆のいる川端の方へ全力で走り、力限りの声で「皆帰れ。日本へ帰れる。すぐ帰れ」と呼びました。夕食時に日本軍の部隊よりこのことを正式に発表されました。復員できる兵隊は小踊りして喜びました。

翌日早朝、歩いて長江府駅に向かって出発、汽車は屋根なし、数日で上海の埠頭に着きました。浜は見渡す限りテント村で北支、中支など各方面からの兵隊でいっぱい、階級章は全部取り処分しました。途端に上官暴行事件が発生して大変な騒ぎとなりました。

乗船間近に広島県出身の機関銃中隊長の石岡安吉さんが「東山君、内地まで兵隊の輸送指揮を頼むよ」という。私は「隊長、東山には無理です。二年、三年、召集兵殿の中での初年兵の私です。

断ります」というのですが、隊長は「頼む、階級章を処分してから隊の統率が出来なく、信頼する兵隊がみつからない。頼む」の一点ばかりです。そこで私は「隊長、必死の覚悟でやります」と答えました。船は海防艦で二百人ほど乗船、港を出ました。兵隊は一度に疲れが出たのか、その上、波が高い玄界灘を通る頃には暴行が始まり、日頃不信を抱いていた将校や下士官を海へ投げ捨てるという。私は、その暴行を阻止するため、必死に彼等の身体に組み付いて、力の限り腕をつかまえる。最後には将校の私物コウリなどを海へ何個も投げ捨て、将校や下士官の身体には異常なく、どうにか命だけは救われ、やっと故郷の土を踏むことができ、皆上陸出来ました。

私は倒れて立えず、担架で海兵隊の医務室へ送られました。復員式には出席できず、後で大隊長よりの表彰状を頂きました。

身体の回復を待つて貨車に乗り、原爆被害の広島を通り、大阪駅で乗り換え、北陸線で富山駅に

着きました。駅前には焼野原で、駅前松の木も黒焦げでした。富山駅から釜ヶ淵駅にたどり着くと、丁度田植え頃で、家に着き家族と会い、互いに夢かと思いました。

富山まで帰る汽車の窓より見た戦争の惨禍、還らぬ戦友を思うと、私の胸は張り裂けんばかり。多くの戦友が戦病死した中で、私は自ら体得した信念で生きて帰りました。この身体は郷土復興に少しでも力になればと決意を新たにしました。

昭和二十一年六月復員、富山県中新川郡立山町末三賀へ帰りました。末三賀は江戸時代には加賀藩の領地で、開拓者であった私の祖父母が明治初期、現在地で酒醸造業を始めましたが、現在、この酒造業はやめています。

戦後農地は水田、畑共に五十アール、復員時は食糧不足で米の増産のため一粒運動に力を入れました。

私は農地が少ないので、木材加工業も営みました。また、農業用水管理常東用土地改良区総代

を二期、農地基盤整備立山土地改良区総代を二期、釜ヶ淵村農業共同組合監事を一期、理事を二期勤めました。

平成六年七月一日、安全思想普及徹底と安全水準の向上に顕著な功績に付いて、内閣総理大臣表彰を首相官邸で受賞しました。

【解 説】

体験記執筆者は、昭和十七年五月の徴兵検査、同十八年一月十日、富山東部第四十八部隊第二機関銃中隊に入隊（元富山三十五連隊）する。

三月十一日、下関で輸送船に乗り込む。朝鮮釜山港に上陸、鮮満国境通過、三月十五日朝、老黒山着、第二機関銃中隊窪田隊へ配属され、原野の丘陵地の半地下造り兵舎で初年兵教育を受ける。

馬が百五十頭程いて、兵舎の掃除、馬の手入れが難渋であった。しかし内地と違い、ここでは私的制裁はなく、初年兵は大変かわいがられる。兵舎内のペチカは二十四時間石炭を焚く、石炭は山

から掘り無尽蔵、外は零下三〇度、体感温度は六〇度、手足はしびれ、麻痺する。

七月、八月頃より戦況は悪化し、硫黄島玉砕、サイパン島玉砕のニュースもあり、関東軍でもソ満国境に戦車壕構築に各部隊が移動、集結する。

昭和十九年二月十一日、大動員命令により、第十野戦補充歩兵第一大隊に転属となる。二月二十九日夜、掖河を出発、満鉄有蓋貨車で揚子江を渡り南京に到着する。さらに小舟で遡行して漢口に上陸。ここから鉄道で長江府駅で下車、今度はトラックに機関銃を取り付け、五台編成で徳安方面へ出発、湖北省徳安に着く。

目的地の床河鎮に着き、ここに警備駐屯地がある。

全機関銃中隊や兵隊も揃ったところで、頭の毛、足と手の爪を切り、遺言を書き、名前確認の番号入りメダルを受け取る。

床河鎮では、米戦闘機の攻撃に被害も多く、警備も厳しい状況となる。年が明けて床河鎮を出発、

天門県の天門に到着する。ここで独立歩兵第五百五大隊機関銃中隊に編入される。兵隊の食糧も現地で調達となる。

ここは夜は二時三十分頃に明るくなり、その上日中は暑く、屋根の雀が焼け落ちる程である。寒くなると雪が一尺程積りますが三十分程で消えてなくなる。

八月二十日頃どこからともなく降伏のニュースが耳に入り終戦を知る。八月二十五日、武装解除、野戦倉庫に捕虜として収容され、昭和二十年九月五日頃、中国軍第九十五師団副官から中国の第九十五師団の副官所属の倉庫に集められた武装解除の兵器類や日本軍馬の数量等の把握と管理方法の打ち合わせとなる。

復員船で波が高い玄界灘を通る頃、暴行が始まり、日頃不信を抱いていた将校や下士官を海へ投げ捨てるという。執筆者は、暴行阻止のため、最後には将校の私物コウリなどを海へ投げ捨て、将校、下士官の命だけを救い、ようやく故郷の土を

踏むことができた、という。

満州駐屯から北方守備へ

熊本県 坂井徳長

私は熊本県八千代郡千丁町大牟田という日本一の畳表の産地の農家の長男として生れ、当時、二町三反歩を耕作する農家でした。米麦のほか、藷草いぐさを作付けし、畳表を製造するのです。女の人は朝早くから夜遅くまで畳表を織っていました。その当時、畳表は毎日現金に換わるよい副業でした。

私は兄弟が多く十人いました。二歳違いで家には子どもがぞろぞろいました。父も母も十人の子どもを育てながら夜は遅くまで働いていたし、いつ寝るのかと思う時もありました。ただ子供も学校から帰ると、皆それぞれ仕事をしていました。当時農家も戦争で食糧不足で、米麦は供出制度で自分の作った米は全部供出して、不足すると外から買っても供出していました。苦しい時代でした。

私と友人の二人は、昭和十八（一九四三）年二